



季節を知ったら  
暮らしが楽しくなった

〔第三九七号〕

夏至<sup>げし</sup> 六月二十一日

## 小津安二郎の日記

「六月の限り」という季語があります。陰暦六月が尽きることで、今の暦では七月末にあたるのでしょうか。しかし、一年の半分が過ぎる六月末は伊勢神宮でも神職だけでなく、職員全員による大祓<sup>おほはらい</sup>が行われるように、身の穢<sup>けが</sup>れを祓<sup>はら</sup>う時期でもあります。また、一年の半分以上を過ぎた節目は、この半年を振り返る機会にもなります。日々の行ないを記録する日記をつけている人なら、日記を見返すこともあるのではないのでしょうか。

今年生誕百二十年の節目となる映画監督の小津安二郎<sup>おつやすじろう</sup>は、松阪市で九歳から十九歳の青春期を過ごし、伊勢市の宇治山田中学校(現在の宇治山田高校)に通っていました。小津はこまめに日記を付ける人で、それが小津研究の資料にもなっています。大正十年の日記の最初のページは、正月のこと。

一月一日(土) 曇

雪に暮れ雪に明けるや去年今年(中略)山田駅は落成していた。帰りに面白い男がいた。六畳で炬燵に当たって蓄音機を聞く(中略)夜更けて百人一首をした。十時過就床 年玉三円父より貰う。

曜日、天気、就寝時間など、その日にあったことを細かく記しているのに驚きました。面白い男はどんな人物だったのか、蓄音機でどんな音楽を聴いていたのか、百人一首の十八番<sup>おぼこ</sup>の札はあったのか、など小津青年への想像がふくらみました。ほかにも、大正七年の二月十三日には、「急いで汽車に乗り赤福を買い家に帰ればみんな吃驚」、同年五月五日は、「十九人の舎生と星野先生と短艇に乗り二見をさして出発大湊に上陸した」と記されており、活発な中学時代を過ごしたことが伺えます。

小津の日記を読んでいくと、日々の出来事を書き連ねることで、自らを振り返ることができ、それが人生の糧<sup>かて</sup>になっていくように感じました。これからの半年、手帳にでも日々も出来事を記そうかと思っっている次第です。

文 千種清美



# おかげの里便り

## おかげ横丁

### ○七夕の節句

七夕の行事は二千年以上昔に中国で生まれ、日本には、奈良時代に伝わったとされています。江戸時代になると、短冊に願いごとを書き、笹を飾るようになりました。この風習は、今も全国各地に残っています。

古くから伝わる節句の文化「七夕」を大切に、皆さまも星に願いごとをしてみたいかがですか。

と き／7月1日(土)～7日(金) 10:00～17:00 (催しにより異なる)

ところ／おかげ横丁一帯

※諸事情により、やむを得ず内容の一部または全体を変更させていただく場合がございます。

#### ●伊勢紹刺し体験

裁縫の上達を願う七夕の節句にちなみ、日本の伝統文化のひとつ「紹刺し(ろざし)」に挑戦しましょう。伊勢紹刺しのペンダントトップや、紹刺しをあしらったうちわを作っていただけます。

日 時／7月1日(土)、2日(日) 10:00～17:00 (16:30受付終了) ※所要時間約30分～

場 所／おかげ横丁内「特設会場」

料 金／各1,500円(税込)

講 師／伊勢紹刺し 彩いち主宰 西川佐恵子

#### ●横丁サイダーを使った七夕シャーベットづくり【事前予約制】

五十鈴川の伏流水を使用したおかげ横丁オリジナルの「横丁サイダー」をシェイクしてなめらかな食感の冷たい七夕シャーベットを作りませんか♪

日 時／7月2日(日) 10:00～11:00

場 所／野あそび棚

料 金／1,000円(税込)

定 員／13組(1組4名様まで) ※3歳以上対象

#### ●太鼓体験

七夕は芸の上達を願ったという習わしから、子どもたちに太鼓を叩いていただきます。おかげ横丁の太鼓チーム「神恩太鼓」と一緒に、楽しく太鼓を叩いてみましょう♪

日 時／7月1日(土)、2日(日) 12:30～13:00 (11:00～12:30受付)

場 所／おかげ横丁内「太鼓櫓」

料 金／無料

定 員／10名程度(先着順)

お問い合わせ／おかげ横丁総合案内「おみやげや」電話0596-23-8838

## 五十鈴塾

### ○日本人の食文化 夏編

「石麻呂に 吾物申す 夏瘦に よしといふ物ぞ 鰻取り食せ」

万葉集にある大伴家持の歌です。あの時代に鰻を！と驚きますが、新石器時代にはもう食べられていたという説もあります。しかし、かば焼きではなくぶつ切りにして煮たものだったようで、食味よりも滋養のために食べたようです。かば焼きが登場するのは近世後期、江戸で爆発的な人気を得て、以後うな井も今日まで定番の御馳走となりました。

関西地方での夏の風物詩は鯉、これも縄文時代から食べられていたようです。安価なところでは冷奴、素麺、西瓜、トコロテン等々、食欲が落ちる夏にもさまざまな工夫がみられました。もっとも、餅と酒は、「犬も喰わん！」と敬遠されました。なぜでしょうか？

と き／6月21日(水) 13:30～15:00

講 師／神崎宣武(民俗学者・五十鈴塾塾長)

参加費／一般 1,700円 会員 1,200円

場 所／五十鈴塾右王舎

講座についてのお問い合わせ・お申込み／電話0596-20-8251

## 五十鈴茶屋

### ○五十鈴茶屋節気菓子

さと ほたる  
里の螢

宮川の支流・横輪川は、伊勢では螢の名所として知られており、源氏螢や平家螢が美しい光の舞を見せてくれます。白螢とこし螢を、金柑の入った葛寒天で包み、螢火が描き出す情景を表現しました。

あじさい  
紫陽花

梅雨空の下、色鮮やかに紫陽花が咲いています。紫陽花の名は、藍色が多く集まる様子を指す「集真藍(あづきあい)」という古語に由来するそうです。羊羹のきんとんで、紫陽花の七変化を表現しました。

こくとうかん  
黒糖羹

サトウキビの搾汁を、そのまま煮詰めてつくられる黒砂糖は、太陽と大地に育まれた、自然の恵みです。

黒糖の羊羹と錦玉を、琥珀のような色合いに仕上げました。こくのある甘みで、ひと時の夏時間をお過ごしくださいませ。